津高同窓会報

発行所
津市新町３丁目１－１
津高等学校
同窓会事務局
TEL･FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

ごあいさつ……2
七十年前のその時……2
雑感……3
老いと電子……3
麦わら帽子の夏……4
福島の復興を願い
原発に頼らない世界を……4
親子旅行……5
文部科学大臣になって……6
イケムラレイコ展開催……6
美術館学芸員になって……6
東日本大震災義援金……7
陶工そして教育……7
「対話と連携」のまちづくり……8
『人生八十年』の刊行……8
第二回津高同窓会親睦テニス大会……9
津高校進路指導状況……9
各地で同窓会開催……10
物故者……10
平成23年度同窓会を終えて……11
同窓会室が移動しました……11

傷ついて起ち上がる時は今ぞ

ごあいさつ

同窓会長　飯田俊司（昭和36年卒）

平成十九年六月に会長に就任してから五年目を迎えました。この間津高創立百三十周年・津高同窓会設立五十周年記念事業をはじめ各種行事を実施し、会員間の親睦を高めることが出来ましたのも会員の皆様や役員、事務局のご協力の賜物と感謝しております。

今年は、未曾有の被害をもたらした東日本大震災のみならず台風の被害も各地で発生しました。会員の皆様で当該地域にお住まいの方もおられますが、皆様のご無事と一日も早い復興を心よりお祈りいたします。この震災を契機にわが国の地震・津波の歴史やメカニズムなどがよく報道されるようになりました。

四つのプレートの境界が入り組み、これまで多くの地震が周期的に発生してきました。ただし、地震が記録に残っているのはせいぜい千四百年程度に過ぎず、未知の地震がそれ以前にあったに違いありません。その意味では将来も想定外の地震が発生することを覚悟しなければなりません。

台風も同様、毎年のように日本を直撃して多くの災害をもたらしてきました。日本の自然はこのような残酷な面と四季の存在、温暖な気候、豊かな緑に恵まれているなど優しさも併せ持っています。

こうしたことから、日本人は自然を敬い、自然と敵対するのではなく、震災や天災には怒りというよりもむしろ試練と受け止めて、災害を乗り越えようとしてきました。被災者の秩序正しい行動、他人を思いやる気持ちなどが世界の賞賛を浴びたのも当然です。

近年、日本の精神の荒廃が至る所で見られますが、この震災を機に日本文化の良さを再認識すべきではないでしょうか。

さて、今年の同窓会活動を振り返ってみますと、五月に東京同窓会、九月に名古屋同窓会、十一月に大阪同窓会が開催され、何れも大盛況でありました。一方、平成二十年度より活動を中止していた九州同窓会が七月に解散を決定し、十八年間の活動に幕が下ろされるという残念な出来事もありました。

本部（津）の総会は八月六日に開催されました。出席者総数七百六名（うち陳川三十三名、三重桜四十八名、津高六百十四名、来賓十一名）で、フィナーレの校歌斉唱ではそれぞれの青春時代を思い起こし、同窓会の絆を再確認いたしました。

また、四月五日には東日本大震災に対し日本赤十字社を通じて義援金百万円を津高同窓会として届けるなど活発な活動をしてまいりました。

来年も引き続き会員の皆様のご支援、ご協力の下、活動を行っていきますのでよろしくお願いいたします。

タイトル・書「津中校歌」より　工藤雅俊（昭和45年卒）
絵「夜の浜辺」　イケムラレイコ（昭和45年卒）

ご挨拶

学校長　榎本和能

会員の皆様には、ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。平素は、本校の教育活動にご理解とご協力、ご支援を賜っていることに、心より感謝申し上げます。

現在、学校の使命を「高い知性と教養を持ったリーダーの育成」として、高い志を抱いて社会に貢献できる人材づくりを目指しています。そのため、「文武両道」の指導とともに、人間力の向上と進路実現に力を入れた教育を行っています。

今年度の部活動の入部率は九十二％超であり、全国インターハイにはボート部が五年連続出場を果たし、全国高等学校総合文化祭には新聞部と文芸部の生徒が出場しました。

進路実現の一層の向上を図るため、生徒の変化に応じて、学力面の指導を年々進化させています。最近の生徒は、真面目ですが受身の傾向が強くなっています。そのような状況を踏まえ、日々の自学自習時間の調査を行うなど、できる限りきめ細かい取組を行っています。また、今夏より一・二年生の夏季課外は午前中に行い、午後の部活動時間を保障しました。その結果、午前七時半から課外開始という光景も見られ、学校全体として「文武両道」を実践していくという意識がより高まったように思います。

皆様のご期待に添えるような学校づくりに向け、教職員とともに全力を尽くす所存でございますので、今後とも母校に対するご支援をお願い申し上げます。

七十年前のその時

堀川　泰義（陳川・第63・64期）

その時とは下腿にゲートルを巻き、日々力強く歩んで旧制津中学の校門に向かった日々のことである。昭和十七年四月に入学した陳川第63期生（昭和二十一年に中学四年で卒業或いは進学）第64期生（昭和二十二年に中学五年で卒業）五十五名×五組＝二百七十五名は厳しい戦時期の教育を受け、しかも稀有の状況下に翻弄されることとなった。

昭和十九年四月二十五日、先輩の津中五年生が三重工業（戦前東洋紡績、今の津球場一帯）へ緊急学徒勤労動員。その七月中旬、三菱航空機津工場（戦前岸和田紡績、戦後近江絹糸）に同じく先輩の津中四年生動員。立て続けに七月二十八日、我々三年生にも学徒動員がかかり、それも動員先は三菱航空機の四日市工場。全員寮生活の下で勤務、期日までに入寮すべしとの命で身の回り品を持って出立した。

設計・研磨・プレス・航空部品・型作りなど各所属部署にて厳しい促成訓練の旬日を過ごし、八月十一日入寮後はじめて津へ帰省。以後昼間は労働、夕食後に広間で授業を受けた。乏しい食事、勤労の疲労、灯火管制下のことである。

加えて十月二日、我々三年生の一部約九十名と先輩四年生の一部で構成の津中隊は三菱航空機主力の名古屋大江工場に派遣動員される事となり、私もその一員として身の回りの物をもって粗末なバラック建ての星崎寮に入った。

一機でも多く、一刻でも早くの要請に海軍機組み立て大江工場の空気は常に張りつめていた。かくるとき昭和十九年十二月七日午後にM七・九の東南海大地震発生。十二月十八日午後、大江工場のみを目がけたB29編隊による集中爆撃、夜半再び大編隊の爆撃を受け名古屋港臨海工業地帯の空は真っ赤に染まった。併し戦局窮迫し名古屋派遣組は直ちに四日市工場に戻り、従来の生産に従事する。

その四日市も昭和二十年六月十八日夜半の大空襲により職場・寮共に焼失。衝撃を受けて帰省の二日間に一度も母校に帰校する機会無く、六月二十一日から四年生全員津海軍工廠と三重工業へ再動員され配置に就いた。

併し六月二十六日、被爆で三重工業壊滅。七月二十四日、津市街地爆撃あり市民多数爆死す。そして七月二十八日夜半、再び津市中心部は焼夷弾攻撃を受けて廃虚となり、津中学校舎も焼失。昭和二十年八月十五日、無条件降伏と時は動いた。暫らくして軍関係へ進んだ多くの朋友の除隊が始まる。

既成の強大な権威が落ち、ここから新たなる国造りが模索されていった。

戦前、家庭の事情で七人兄弟の中の私と弟と二人を養育してくれていた祖父の元を離れ、皆と合流すべく九月十三日九州佐賀へと旅発った。自分は津中学四年から動員歴により一中と云われた佐賀中学三年に編入され二年後、津中五年へと戻り昭和二十三年、久居の連隊兵舎で卒業した。国存亡のとき軍需工場での労苦と忍耐、支え合った同期友人との「固き絆」、爆風下必死の退避、土地訛りが判らず心細い思いをした遠隔地への突然の転校、戦後のひどい食糧難時代に十人家族で対峙し、これ等を乗り越えた気迫が芯を作ってくれた思いがある。津高校同窓の皆さんに陳川第63・64期のこの様な足跡を語り継いでいただければ幸いと思う。八十二歳、今や減衰期を辿る身ではあるが、母校の益々の発展を切に願って止まない。

雑感

杉浦 茂夫（昭和25年卒）

津中学に入学したのは、終戦の前年、昭和十九年の春でした。終戦の少し前に、津が大空襲を受け、その街の大部分を焼失し、母校も灰燼に帰してしまいました。終戦を迎え、小林徳太郎校長先生が、「これからはデモクラシーの世の中である。デモとは民衆、クラシーとは支配という意味である」とお話しをされました。また、当時の名物教師、ニコチンこと、一見藤太郎先生が進駐軍から追放令を受けられ、「わたしゃ追われて行くわいな」という名文句で離任のご挨拶をされました。これらのお話しをお聞きしたのは、生徒控所（現在なら体育館と言うでしょう）の焼け跡で、周囲には赤茶けた鉄骨の残骸が無残な姿を晒しておりました。この荒涼とした光景は、今も、なつかしい、しかし、ものさびしい思い出として鮮明に残っております。

昭和三十七年、母校の教壇に立って、後輩諸君を教えることができると喜び勇んで、母校に着任しました。ところがその年の暮に、津高の火災で校舎の大部分を焼失してしまいました。焼け残った体育館をベニア板で間仕切りして、灼熱地獄や寒冷地獄に耐えながら、そして隣の教室からの雑音に悩まされながら授業を致しました。

このような次第で、私は母校が焼け落ちた姿をこの目で二度も見たのであります。こんなことを経験したのは私一人ではないかと思いますが、「二度あることが三度あっては」ならないと思い、その後の母校に物理的に近づくことは避けて参りました。その禁を破ったのは、創立百三十周年記念の同窓会行事の「母校の教壇」という催しでした。私どもの恩師の米本宏先生がお話

をなさるというので、友人の川村陽一君と共に出席させて頂いたのです。先生のお若かった頃から始まって、津中・津高の教員生活の思い出を経て、最近嗜んでおられる俳句の秀作を御披露されるという、たいへん興味深い内容でした。先生のお話は理路整然として、よどみなく、司会の方がお座り下さるように何度も懇請されたのを断られて、直立不動の姿勢で、九十分講演を続けられました。百歳に近い年齢の先生が、肉体的にも精神的にもこんなに頑健であられることに深い感銘を受けました。

惜しむらくはこの五月、先生は満百歳で永眠されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

このような文の結びには、「母校の発展を心よりお祈りします」という常套句がよく用いられます。「母校の発展」を願わない卒業生はないと思いますが、私はこの語句を使うのを躊躇します。この語句は具体的にどんなことを意味しているのでしょうか。野球部が甲子園に出場したとか、大学進学の成績が向上したとか、卒業生の中から文化勲章受章者が出たとか、いろいろ事例は浮かびますが、いずれも一時的なものに過ぎません。私が常日頃感じていることは「母校に対する誇りと感謝」ということです。つまり津高の質の高い教育水準と自由な校風、それらに培われた友情の絆に対する誇りと感謝であります。これらを楽しい思い出として噛み締めながら、毎日を過ごして参りたいと思っています。

（甲南女子大学名誉教授）

老いと電子

別所 茅津（三重桜・昭和19年卒）

この頃、市役所から来る広報でもテレビを見ていても「インターネット」とか「ホームページ」とか、わたしには縁遠い言葉を耳にしてふっと戸惑いを感じる。現にこの度のこの原稿依頼の文書にも「今までの会報は以下のホームページでもご覧いただけます云々」とあった。これが現在の日常ということなのだろう。わたしも亡母の晩年に近い年齢になってよく思うのは、今はあの頃とは比べものにならない速さで世の中が進んでいるという事である。

先般、お盆に帰省した息子が、使わなくなったパソコンを持ってきてくれた。パソコンには百科辞典が入っているというので、かねがね使ってみたいと思っていた。そこで半日特訓してもらったがマウスとかいうものは一寸動かしたつもりが、画面上の矢印がパッパッと大きく飛ぶので目まぐるしい。マウスの持ち方動かし方から教わることになった。そこで浮かんだ拙詠。

○帰省の子に手ほどき受くる
　パソコンの矢印移動最初の試練

○指先と脳の連携ままならず
　パソコン操作は馴れと子の言ふ

○八十も半ばとなりしわれの脳
　いち夜漬など無理かパソコン

息子が、そう簡単に壊れるものではないからいろいろやってみたらいいよと置いていってくれたが、来春の彼の帰省まで机の下に眠っていることになりそうな気がしている。

わたしはせいぜい電子辞書止りで、それもいろいろある機能のうち使うのは広辞苑と漢字源くらいのもの。電子辞書は手軽なのがよい。常にテーブルの隅に置いてあり、新聞を読んでいてもテレビを見ていても文章を書いていても、よく使う。ともかくわたしが最もよく使う機器といえるのは電子辞書ということになるのだろう。

わたしより四つ若い友人は「インターネットで調べたら云々」とのたまう。

来春はわたしもマウスをチッチッと動かして「インターネットで調べたよ！」ってことになればよいのだが、ここにきて四つの歳の差は大きいからなあ、と一寸悲観的。

今日は新生姜の梅酢漬がきれいな紅色に仕上り、瓶につめて冷蔵庫へ入れた。一年中に使う紅生姜の出来上がりである。うす紅色になった瓶を手にひとり悦に入っていた。そして、こんなことが一番わたしの性に合っているなあと思ったことであった。

麦わら帽子の夏

井土　真杉（昭和29年卒）

病気で一年遅れて三年生の夏休み前。黒い制帽がなんとも暑苦しいので、いささか悪戯ごころも手伝って、物置にあった作業用の古い麦わら帽子に校章と白線をつけて登校した。

早くも初日、中央廊下で中村重遠先生に呼び止められる。「おかしな帽子やな。ちょっと職員室へ来い」。職員室で重遠先生、生活指導担当だった森岡正先生に「こんなんがおりましたけど、どうですやろ？」。森岡先生は苦笑いしながら検分され、「まあ徽章も白線もつけとるので、いいのと違いますか」これで無罪放免となった。

思えば当時の津高校、戦災から8年で体育館もない粗末な環境だったが自由な空気だけは横溢していた。「戦後民主主義」が教育現場にも花咲いた季節だったといえようか。生徒たちは腹を空かしつつも活発だったが、何より先生がそれぞれ個性的で、「管理教育」などとは対極の自由な雰囲気をもっていた。逆らう教師は首にするというような、今どこかの知事一味が計画中の方式だと、おそらく津高の職員室は空っぽになったことだろう。

さて、夏休みに入ると大事件が待っていた。わが野球部が、三重県代表としては三十八年ぶりに夏の甲子園に出場することになったのである。いまでこそ三重県から一校は出られるが、当時はさらに三岐大会で勝たねばならず、ずっと岐阜勢の壁が厚かった。それが

この年の津高は、後に巨人から西武の監督になった森捕手を擁する岐阜高、阪急のエースとなって254勝した梶本投手を擁する多治見工など、〈寄せくる敵をうち破り〉（野球部の歌）三岐大会を制したのであった。

私のクラスに大川祐一君（後に早大、故人）という野球部のエースがいて、「すごいインドロップを投げる」という評判だったが、ここまでやれるとは実は思っていなかった。

私は級友たちの応援に予選から三岐大会までの全試合、炎天の津球場へ通った。もちろん麦わら帽子着用で。応援団と言っても当時ブラスバンドはおろか、リーダーの組織もなく、自発的に躍り出た袴姿の団長を中心に、もっぱら高歌放吟、三三七拍子の拍手、蛮声などで素朴に応援したものだ。ただ津高は大したもので、できたての校歌、応援歌のほか、旧津中からお下がりの出陣歌、野球部の歌、凱歌などレパートリーに富み、試合の進行に合わせて団扇に貼った歌詞を見ながら斉唱した。おかげでいまも私はすべて覚えている。優勝戦で多治見工を3対0で破ったときに歌った凱歌、〈勇士が夢の晴れ姿／聞けやわれらがこの歓呼〉のくだりでは、応援団の前に整列したナインの姿もぼやけて見えたことを思い出す。

校歌斉唱のときだけはみんな起立して、男は制帽を片手に振りながら歌うが、麦わら帽は握りにくい。こうして愛用の麦わら帽子は連日の津球場でぼろぼろになった。二学期にはまた黒い制帽で登校し、「津高ロマン・ロラン友の会」が主催した桑原武夫講演会（中央公民館）の準備などに取り組むこととなる。

（三重日仏協会副会長）

福島の復興を願い
原発に頼らない世界を

高野　素子（昭和31年卒）

私は福島に移り住んで四十年になります。去る八月三十一日、一ヶ月の夏休みが終わり高校生の孫は東京へ、中学生の孫は札幌へと旅立って行きました。娘夫妻と私が残り、特に下の孫は初めての別れなので仙台空港へ送ったとき、その寂しさは一入のものがございました。しかし二度と逢えない別れではないのですが……。

東日本のあの災害で、一瞬にして父・母・子供など愛すべき家族を失った人を思うと筆舌に尽くし難い悲しみを背負い、その上家屋や家財までも波に呑み込まれ、それでも耐えねばならない切ない思いを察すれば、私など寂しさに浸ってはいられません。

人生において忘れられないあの三月十一日の未曾有の大地震・大津波は人間の作った物が如何に脆いものか、世の無常を感じた出来事でした。

私の夫は開業医でしたので、私は歯車の一つとして医院の仕事を手伝い、傍ら国際ソロプチミストと言う国連の諮問機関でもある奉仕団体に所属しており、今年で在籍二十六年になります。

福島クラブは今期三十五周年の節目を迎え、記念事業の一環として車一台を福祉協議会へ贈呈するそのセレモニーを行う為に集合したその時、「午後二時四十六分」の出来事でした。

M九・〇と言う観測史上最大の地震に遭遇、マイカーから降りたものか、乗っているべきか迷いに迷う中、少し治まった瞬時に全会員贈呈車に集まり、

写真を撮って「ハイ！セレモニー終わり解散！」。もう既に停電、信号の消えた怖い中を車の流れに沿って家路に急ぎました。

当家は築十三年なので家財が散乱した位で済みましたが、隣接の医院は四十年からの代物で娘婿が改装後に、継続使用しており、半崩壊と見なされました。

修理は一週間かかりましたが、何はともあれ、自分のベッドで安眠出来る幸せを心より感謝しました。

高校生の孫の学校は被害地三県外でしたが、全寮制で全寮崩壊し、夜中の地震でなかったので命拾いしました。全員東京に向け脱出！さいたま市に嫁いだ娘が暫く孫を引き取り、親元に帰れたのが十日以上経っての事でした。本校が東京の新宿にあり、ゴールデンウィーク後にそこへ通学しております。

東日本大震災での大津波

多くの子供が原発の放射能を心配して他県に転校してしまい、当家の孫もいろいろ検討結果、札幌市にある学校へ転校させる結論を選びました。

私は福島市の体育館等に避難して来られた方々へ励ましの音楽会やうどんの炊き出しなどを行い、今回の災害で親を亡くした中・高生の為に奨学金を出す活動に取り組んでおります。会に頂いた支援金もその方向で使わせて頂く計画です。

この災害で世界百五十を超える国や機関かの援助の輪が広がり、特に低所得の国からも数百万・数千万のご支援を頂いたと聞いております。

これは戦後日本が続けてきた地道な支援活動に対するお礼の一端かと思います。この様な災害は誰も望むものではありませんが、世界は一つの輪になって助け合わねばなりません。

津高校同窓会からも百万円の大金をご支援下さいましたそうで、被害県民の一人として有り難くお礼申し上げます。

九月上旬（現在）、新内閣が発足致しました。復旧と復興に早急に取り組んでいただきたいと思います。

広島・長崎と二回の原爆を受け、その上今回の原発災害！もう沢山です。福島は四重苦の苦しみを味わい、二十年先まで戻れないと言われている避難地区の人たちの気持を察してください。

「うつくしま・ふくしま」と言われる福島に一日も早く戻れますように頑張ります。天災ばかりはどうにもなりませんが、世界は一つ、世界中の人たちが「人間尊重」を基本理念とし原発に頼らない地球を目指して欲しいものです。

親子旅行

森　悠紀子（昭和38年卒）

母（鈴木千鶴・元津高教諭）の残り少ない人生に母が喜ぶことをしようと昨年から今年にかけて兄弟で旅行を計画、昨年は七月に東北、九月に北海道へ今年は八重山四島へ旅行した。

東北旅行では、母、兄夫婦、弟夫婦、私の六人でレンタカーを借り、兄、弟が運転。母はいつも助手席に座り、外の景色を見るのが大好き。

渋民村啄木記念館、松川地熱発電所を見学、樹海をドライブして八幡平頂上へ一面のガスの中ニッコウキスゲが咲いていた。下った所にリンドウ畑があり「りんどうの里」の看板があった。八戸道を経て陸奥市へ、下北半島へ入り恐山に行った。母は戦後すぐ一歳の娘を病気で亡くしている。その子の供養にと杖をつき線香をもって恐山を登った。

翌日宮沢賢治記念館を見学し、その後遠野物語の「南部の曲がり屋」「かっぱ淵」を見に行く。三陸海岸は潮の香りにつつまれ漁船がたくさん行き来していた。

この東北旅行は去年の話で今年の東日本大震災で兄は支援ボランティアに参加。三陸海岸は無残な姿で言葉にならなかったと言っていた。

九月末には北海道に旅行した。札幌から積丹半島そして神威岬へ。ハマナスの花をみつけ母と「知床旅情」を歌った。途中羊蹄山の夕焼けがきれいだった。翌日層雲峡へ、岩と紅葉が見事。黒岳ロープウエイに乗り、その後ペアリフトに母は弟に抱きかかえられるようにして乗る。九十七歳で杖を持ってリフトに乗るなんてと少々びっくり。リフトの下は残雪があり、りんどうが咲き、チングルマの葉が赤く紅葉し母は楽しそうだった。民芸品店でキタキツネの木工品を母のお土産に購入、店の人が「九十七才黒岳登山記念」と彫ってくれた。その後ＪＲ塩狩駅にある三浦綾子記念館を見学、翌日旭岳へロープウエイに乗る。青空と紅葉がすばらしい景色だった。兄たちは噴煙の出ている所まで登る。母も行きたがったが、登山道は石がごろごろしていて下りが危ないので私と母はアイスを食べながらみんなを待った。美瑛ではお花畑をカートに乗って母と二人で一周する。その後富良野へ。

そして今年五月八重山四島のパック旅行に行った。家族六人だけのマイクロバス旅行。西表島では仲良川のクルーズに参加、マングローブの林の中をガ

石垣島にて

イドさんの案内を聞きながら船を進める。ちょうど「さがり花」の咲く時期でうすいピンクのきれいな花が水面に落ちて浮いていた。一面甘い香りがたっていた。いろいろな南国の植物をみて母は昔訪れたブラジルのアマゾン川を思い出すと兄に話していた。その後由布島へ。島へは牛車にのり三線と島唄を聞きながらのんびり渡る。次は高速船に乗り竹富島へ。ここも牛車に揺られて島を巡る。琉球の赤瓦、白い漆喰、魔除けのシーサー、白い砂道。民家の庭はハイビスカス、ブーゲンビリアに色鮮やかな南国の花が咲き乱れ竹富島は美しい島だった。母には少し大変だったようだがみんなと行動を共にし無事旅行できた。

現在母は兄夫婦と金沢で畑いじり、俳句会に参加したりとおかげさまで元気に暮らしており、冬は雪が多いため弟の家西宮に滞在、編み物をして過ごしている。

母　鈴木　千鶴（現在98才）
兄　鈴木　恒雄（昭和37年卒）
弟　鈴木　穣二（昭和41年卒）
私　森　悠紀子（昭和38年卒）

文部科学大臣になって

中川　正春（昭和44年卒）

私は、津高校四十四年卒業です。七十年安保闘争が盛り上がっていたころで、この年には、東京大学の受験が中止になりました。高校二年の時に生徒会の会長選挙にチャレンジして、すばらしい仲間と出会いました。そのころから政治が好きだったのかもしれません。

このころ、津高校にも大学で過激な反安保闘争をしていた先輩がやってきては、私たちに様々な話を聞かせて仲間に入れようとしていました。とてもよくしゃべる人たちではありましたが、私には、彼らが何を言っているのか理解が出来ませんでした。しかし、確かに、大きな刺激は受けたのだと思います。その気になれば私たちにも世界は動かせるんだ、という闘志がわいてきました。

そこで、重大な決心をしました。アメリカに行こうと考えたのです。それは、好奇心。地球の中心、ワシントンに行けば、もっといろいろなことが分かるのではないかというのが、当時の私の出した夢のような結論でした。

アメリカ人なら英語や留学に必要な手続きを教えてくれるのではと思い、飛び込んだ町のカトリック教会のザーン神父さん。私の思いを半信半疑で聞き、心配して、教会に出向いて神父さんと話し合ってくれた当時の担任の家垣先生。えらいこと言い出したと、初めは大学の先生などに頼んで私にあきらめるよう説得を試みていた父親も、アメリカの大学からの入学許可書を見て、観念して資金の手立てをし始めてくれました。どれだけ感謝をしても足りません。

今、日本が縮み始めているといいます。学生だけに限らず、文部科学省や外務省の若い職員までもが海外に研修に出て行くことに抵抗があると聞くと愕然とします。日本の国内では、社会全体がとても内向きになっています。

ところが、もう一方で、海外に出ると日本に対する期待や存在感が広がっています。昔は、日本と言えば、経済大国のイメージが突出していました。今は、海外で人が日本を語る時、その対象が大きく広がりました。アニメ、若者ファッション、食べ物、医療体制や福祉、高い水準の科学技術などを勉強したいと多くの若者が日本にあこがれています。今度の大震災では、日本人の落ち着いた対応が世界中で感動を呼びました。十年前に七十万人の人々が日本語を学んでいたのが、現在三百五十万人に増えています。こんな状況で、肝心の日本人が内向きに縮んでいては世界に対して申し訳ないと思います。文部科学省は、教育はもちろん、科学技術、文化芸術、スポーツと広い分野を担当します。人が生きるよすがとなる「人生の価値」がどんどん創り出される日本が目標です。日本が外に向かって元気に広がっていく、そのための社会環境を整備する役割を文部科学省が担っているのだと思っています。「日本の元気印は文部科学省から」をスローガンにしています。どうぞ、応援してください。

イケムラレイコ展開催

日時　平成23年11月8日(火)～平成24年1月22日(日)
会場　三重県立美術館

三重県立美術館において津高卒業生として初めて、池村玲子(昭和45年卒)さんの回顧展が開催されています。

彼女は現在ドイツを拠点に活動されていて、作家の内面の発露ともいえるドローイングを、独立した作品として重視してきました。作品に共通するものが、「うつりゆくもの」への関心です。ヨーロッパと日本を中心に高く評価されてきたイケムラ作品の一九八〇年代から現在に至るまでの回顧展です。ぜひご覧下さい。

尚、美術館のご厚意により割引券を同窓会報に同封いたしましたのでご活用ください。

美術館学芸員になって

毛利　伊知郎（昭和49年卒）

私は、三重県立美術館に三〇年ほど学芸員として勤務しています。大学一、二年の頃に訪れた京都の美術館や博物館で、教科書でしか知らなかった絵画や彫刻の名品に分からないながらも感動し、そうした芸術作品について研究する学問があることを知って、学部では美学美術史を専攻しました。

大学院を終える頃、三重県が美術館を建設する計画が本格化していたことから、縁あって準備室に職を得ることができ、今に至っています。最近は、

学芸員という職業も以前よりは認知されるようになってきました。それでも美術館学芸員というのは分かりにくい職業のようで、美術館で何をしているのかとよく尋ねられます。

博物館法によると学芸員は、「博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどる」と規定されています。具体的には、所蔵品などについての様々な調査研究、展覧会の組織などが大きな比重を占めています。自分の専門分野について調査研究もおろそかにはできませんし、庶務や肉体作業などをこなすことも求められます。学芸関係の様々な業務が分業化されていない日本の美術館ではどうしても仕事量が多くなりがちですし、苦労がないわけではありません。しかし、すぐれた芸術作品や芸術家と接することで、その多くはどこかへ行ってしまいます。

教科書に載っているような名品を間近に調査している時は、何ものにも代え難い至福の一時です。また、日本を代表するような芸術家たちと接する中で、人間として重要な多くのことを教えられました。すぐれた作家たちとの出会いは、私にとってもかけがえのない財産です。

縁あって当館に作品をまとめてご寄贈いただいた彫刻家の柳原義達さんの謙虚な人柄、お目にかかるといつも笑顔で接してくださった彫刻家の佐藤忠良さんのリベラルな姿勢、三重出身ということで親しくさせていただいた画家の元永定正さんの前向きな人生観、今もお元気な大橋歩さんの好奇心旺盛な生き方等々、信念を強く持って妥協することなく創作活動を行ってきた方々との出会いは、忘れようとしても忘れることができない思い出とともにあります。

本年十一月から当館で開催するイケムラレイコ(池村玲子)さんの個展も、私にとってはこうした出会いの一つです。この展覧会は、三年程前に「故郷の美術館で展覧会をなさいませんか」と津高の先輩でもあり、国際的に活躍するイケムラさんに声をかけてご快諾いただいたのが発端です。その後、関係者が協議を重ねた結果、東京国立近代美術館と当館との共同企画という理想的ともいえる形で実現することができました。この展覧会の副題は「うつりゆくもの」ですが、実は三重展では「ただいま」という副題も候補にあがりました。三重の自然や風土とも根底で関わっている彼女の作品が、故郷でどのように受け入れられるか大いに興味をそそられます。そして、私にとっては貴重な思い出がまた一つ増えました。

（三重県立美術館副館長）

東日本大震災義援金

三月十一日未曾有の東日本大震災で命を落とされた方々に対し心よりご冥福をお祈りいたしますと共に、被災された皆さま、そのご家族に対し心よりお見舞い申し上げます。

津高同窓会では、三月二十八日に役員会を開催し、東日本大震災に義援金を贈ることを決定し、百万円を贈呈することといたしました。

四月五日、飯田会長が、日本赤十字社三重県支部を訪問し、浦中日本赤十字社三重県支部事務局長にお届けいたしました。

被災地の一日も早い復旧と復興をお祈り申し上げます。

陶工そして教育

清水　明（昭和53年卒）

本年の同窓会総会では、先輩・後輩に、ご支援いただき開催できたことに感謝しお礼申し上げます。

私は、高校卒業後、今も生業としています陶工の道を歩んでおります。多くの方々にお目にかかりご縁を紡いできました。修行中、師匠に教わったことで今でも肝に銘じていることがあります。それは「無理に頑張るな」、「人を驚かす（不快）な物は創るな」、「経験は大切だが、余りにも創り込むと周りが見えなくなる」、そして「慣れるな」です。日々物を創ることで作品は出来上がります。作品、作品と気張りすぎると見失うことがあります。今、今日此のときにしか創れない物があり、ひとつひとつが初作品になります。専修学校で轆轤を挽く時は、湯飲み茶碗を一日二百個を目標にしていました。清水焼の職人を養成する学校ですからそれが技の習得です。弟子入りすると電動の轆轤は使用禁止で、京風の手回し轆轤で一年程湯飲みばかりを作っていました。今思うと大変良い経験でした。電動ですと一定の速度で回転するのでだ土を抑えると形が出来上がります。手回しの轆轤は回転が弱くなる前に一気に土を引き上げます。その動作が今の仕事にも生かされていると感じながら慣れることを嫌い、土に創らせていただいています。

二年前より三重県で教育委員をしております。母校である津高にも視察に伺いました。後輩が自主自律の精神で研鑽する姿は頼もしく、次代の日本・三重を逞しく創造してもらいたいものです。一方で悩ましいことが身近で起こっています。居場所のない子ども達が増えています。三度の食事も儘ならず毎晩同じ布団で眠れていない子ども達がたくさんいます。家庭があっても孤独で、リストカットにまで及ぶ子ども達、保護者から存在を否定された子ども達、居場所のない子ども達は孤立し、又、群れます。このような子どもが安心して生活できる環境が、早急に必要だと感じています。

教育委員会でも、微力ながら発信していきます。多くの先輩・後輩の方々にもご協力・ご指導いただき何か形として築ければと念願しております。まわりを見てください。皆さんの近くでも悲鳴を上げている子どもがいます。

（三重県教育委員会前委員長）

「対話と連携」のまちづくり

前葉　泰幸（昭和56年卒）

四月二十四日に施行された津市長選挙において、多くの市民の負託を受け当選の栄に浴した。地方自治に長く携わってきた者として、故郷津市のために尽くすことができるのはありがたく幸せなことである。

「命を守る」、「心をつなぐ」、「くらしを創る」――この3つの柱を公約として掲げ選挙に臨んだが、東日本大震災の直後とあって命を守るための防災対策への市民の関心は高く、選挙期間中から多くのお声を寄せていただいた。なかでも特に心に残ったものが二つあった。一つは、大門地区のある自治会長のお話で、住民が津波から逃れるために周辺の中高層の民間ビルに夜でも入らせていただけるよう、すでに折衝を始めているとのことであった。もう一つは、雲出地区のある会社が、白塚町に所有する独身寮（三階建て）を周辺に居住する高齢者の一時避難場所として使わせてほしい、と地元自治会から頼まれ了承した、という話である。

海岸沿いの低層住宅にお住まいの方々には、まず津波から逃れていただく必要がある。そこで公約に、

「地震・津波対策として、民間会社や団体に協力を求め、緊急時には高層階の鉄筋コンクリートビルに緊急一時避難ができるよう働きかけます。」

と書き込み、「三万人分の避難場所を確保します。」と語った。

この公約は、「津波避難ビル」制度として実現した。手を挙げてくださる企業等を募集したところ、さっそく九社の方々が応募してくださり、七月十四日協定書に調印する運びとなった。

市長就任後も、引き続き防災に関連する話題を市民から投げかけられることが多く、例えば避難所について、「地区の避難所が海寄りにあるが、東に向かって逃げるのは不安だ。」とか、「避難所に行く途中の橋が通行不能の場合、どうすればいいのか。」などといった声をしばしば聞いた。

早速調べてみたが、津市の地域防災計画では、どの地区がどの避難所を使うかという指定はなされていなかった。そこで「広報津」の六月一日号に、「避難所に地域指定はありませんので、最寄りの避難所をご利用ください。」と明記した。住み慣れたまちのどこがより安全か、それは住民が一番よく知っている。各自がその場その時の一瞬の判断で、適切な避難所を選択していただくのが最善の方法であろう。

津市長に就任して半年、防災対策の例一つとっても、いかに津の市民が、そして自治会が、自らが生活する地域のことを真剣に考え、積極的に行動しているかを実感する毎日である。

私が政治姿勢として掲げる「対話と連携」は、高い自治意識を持つ津市民の皆さんに必ずや受け入れていただけるものと確信している。市域をくまなく歩き、地域の皆さんとのご縁をいただき、対話を重ね、市民と行政とが手に手を携えて、わがまちへの思いを協働して実現することにより、「風格ある県都・津市」を創造してまいりたい。

（津市長）

『人生八十年』の刊行

塚澤　正（陳川24年卒）

平成二十三年十月、陳川66回・三重桜47回の同期会によって『人生八十年』という冊子が刊行された。編集担当者は陳川の真柄尚忠君である。同書は昭和五十七年八月に発行された『人生五十年』の続編でもある。

前回は「随感・仕事・思い出・名簿」などで構成されていたが、今回は「在学中の年譜・物故者を含む全在籍者（五百七十一名）の名簿・実在会員の近況」から成っている。頁数百二十一頁。因みに本誌出版の諸費用は学友五人の篤志による。

昭和二十四年三月に津中学並びに県立津高女を卒業したこの学年は、陳川・三重桜ともに閉校となった旧制中学の最後の卒業生であり、戦中および戦後の、教育制度の激変を経験した学年の一つでもある。

旧制中学はその閉鎖と同時に新制高校に移行するのだが、この時、当時の津市および安濃郡・河芸郡在住者以外はその出身地に配置換えとなり、高校の第三学年を久居・松阪・亀山など全く新しい環境で上級校への受験に取り組むこととなるのである。

同会は「八十年」の会合を以って幕を閉じたが絶ち難い絆のもと、折に触れてグループ毎に健康を確認しあうこととなろう。

第二回津高同窓会親睦テニス大会

朝熊　完（昭和43年卒）

去る十月十六日（日）第二回津高同窓会親睦テニス大会が、母校のテニスコートにて開催されました。OB三十五名、生徒二十名の参加を得て楽しいテニス日和となりました。

前日はあいにくの雨で、気を揉みましたが、当日は心配をよそに秋晴れとなり、あらかじめ参加申し込みいただいた方のほぼ全員でのゲーム運びとなりました。

昭和三十年代卒の方々の参加が多く、次いで四十年代、また、昭和二十年代卒の方々の参加も得、テニスがどの世代にも受け入れられている身近なスポーツであると感じさせられました。

八チームでの団体戦で、優勝は西沢博子（昭和32年卒）、伊藤　武（昭和33年卒）、上野壮一（昭和35年卒）、佐々木とし子（昭和45年卒）、今井典子（昭和51年卒）、打田一馬（昭和59年卒）、花村洋人（二年生）の皆さんで圧勝でした。他の参加者も、各々ベストプレイをパフォーマンスされ、試合後の皆さんの顔はそれぞれが優勝者の顔でした。

同窓会事務局をはじめ、関係者皆様のサポートにより、充実したテニス大会にすることができました。次回も、皆さんと共に新しい参加者も交え、テニスでの交流がますます深まりますよう願っております。

津高校進路指導状況

進路指導部　上村　和弘（昭和59年卒）

津高校では大学入学だけを目的とするのではなく、その先にある「志」を大切にする進路指導を行っています。

その「志」のもととなる生徒自らの人生観・職業観を形成させるため、ホームルーム・個別面談・学年集会・講演会などを通じて計画的に進路指導を進め少しでも多く自ら体験し考える機会を提供するとともに、普段の授業や学校行事などを通して知的好奇心を刺激し、学問への興味・関心・意欲を向上させるように努めています。同窓生の皆様にはこれらの取り組みを行うに当たりまして一方ならぬご尽力・ご協力をいただいております。改めて御礼申し上げます。

また、生徒の幅広い進路指導の実現を保障するために、質の高い学力の構築を目指して、学習指導の充実にも鋭意取り組んでいます。昨年度よりは「中学生を津高生に変える」を合言葉に、入学直後4日間の初期学習指導も始めました。

今春の進学状況については、国公立合格者229名。難関大合格者67名、国公立医学部医学科11名、合計78名という結果を残してくれました。中でも国公立医学部医学科においては近年では過去最高の結果となりました。高い「志」を持った彼らが日本や地域の中心的存在となって将来活躍することを願ってやみません。現状に甘んじることなく、一人ひとりの生徒が自分の個性を大切に伸ばしていけるような進路指導に取り組んでまいります。今後ともご指導よろしくお願いします。

（大学合格者数）

	国立	公立	私立	短大
(2011) H23年	186	43	668	8
(2010) H22年	221	39	764	6
(2009) H21年	210	34	557	11
(2008) H20年	199	40	721	12

	北海道	東北	筑波	お茶の水	東京	一橋	東工大	東京外大	横国大	静岡	金沢
(2011) H23年	8	3	4	0	2	2	1	0	1	6	6
(2010) H22年	8	2	1	0	4	2	2	2	3	2	12
(2009) H21年	16	7	1	0	5	2	0	1	1	5	10
(2008) H20年	4	1	1	0	6	3	1	3	2	2	8

信州	名古屋	名工大	名古屋市立	三重	県立看護	京都	大阪	大阪府立	大阪市立	神戸	奈良女	広島	九州	慶応	早稲田	上智	青山学院	中央	東京理科	日本	明治	法政	立教	南山	名城	皇學館	龍谷	京都産業	同志社	近畿	立命館	関西	関西学院
3	14	9	7	57	1	10	18	4	5	9	0	5	1	12	17	5	3	8	13	4	11	5	3	46	34	31	20	7	75	11	91	44	23
5	16	4	1	51	3	15	32	5	4	12	3	4	0	19	20	4	5	22	22	3	31	9	5	50	32	24	10	3	98	27	111	47	27
6	19	3	5	55	2	9	29	8	1	6	1	6	2	16	20	5	6	18	20	2	15	7	4	39	26	20	6	4	47	18	59	29	24
5	21	14	5	55	0	11	25	10	7	6	1	2	0	11	27	3	0	10	28	11	15	5	3	42	50	26	12	11	62	34	93	47	32

各地で同窓会開催

東京同窓会

東京同窓会は五月二十八日(土)霞が関の東海大学校友会館で、小雨の中、百五十余名の出席で開催されました。

本部から飯田会長、乾杯の音頭をお願いした田川副会長、事務局の佐々木さん。大阪同窓会の奥田会長、米虫副会長。榎本津高校長、昭和四十七年から教壇に立たれた伊藤昭彦先生をお迎えしました。三月の東日本大震災への哀悼と共に、苦難の中、先輩後輩の絆を一層深めたいという谷口会長の挨拶で始まりました。39年卒元・気象庁予報官の入田央氏の「三、七七六mで気象を観る」の講演の後、飯田会長からNHK大河「江」にまつわる津の話題や、津市からキャラクターも上京参加し、懇親会がスタートしました。歴史本の即売コーナーなども一役、会場は熱気に包まれました。校歌斉唱では津中卒の稲葉さん、三重桜卒の信藤さんの熱唱の後、全員で津高校歌を歌いあげました。今回は副幹事の51年卒と共にでお世話させていただきました。詳細は東京同窓会ホームページをご覧下さい。

松浦　修（昭和39年卒）

名古屋同窓会

本年度名古屋同窓会は、九月十七日、名古屋東急ホテルにて開催されました。百四十四名の先輩後輩がにぎやかに集い、改めて津高の歴史・伝統に喜びを感じることができました。

総会に先立って、宇宙航空研究開発機構の原　宣一様（昭和36年卒）による講演が行われました。私にとっては

物故者

謹んでご冥福をお祈りいたします。

（平成23年10月31日現在）　（敬称略）

旧職(4)　米本　宏
旧職(19)　岡　昭一
旧職　小野　十美生
旧職(20)　慶福　光男
旧職(28)　後藤　質
旧職　中川　亮太
陳川昭2　大橋　清一
昭6　糀谷　重郎
昭7　真柄　了瑞
昭9　楠　正彬
昭10　武部　晃吉
昭12　上部　貞弘
昭12　中村　悌次
昭12　森川　亀夫
昭14　奥谷(山田)道夫
昭14　森田　定雄
昭15　近藤　千秋
昭16　小菅(田中)淑行
昭16　山田　純
昭18　大井　明
昭18　松岡　基生
昭19　渥美　俊一
昭19　平　勝
昭19　武田　徹也
昭19　光本　允彦
昭20　垣野　董
昭21　出岡　司人男
昭22　伊川　藤正
昭22　川合　健二
昭23　長﨑　千之
昭23　丸山　修一
昭24　北川　吉次
昭24　竹内　豊
昭24　中　薫
昭24　古川　貞郎
昭24　林　寿
昭24　平子　博司
三重桜大9　川合(松永)のぶ
大11　松葉(青木)芳子
大15　上山(山下)のぶ
昭2　遠藤(田端)とし
昭3　宇野　つゆ
昭3　田村(古川)春子
昭4　谷口(田中)こう
昭4　原田　フユ
昭7　臼井　ヨシ子
昭10　松島(新田)貞子
昭11　中川(中島)かず子
昭12　松井(久保)志めの
昭12　山下(増田)智枝子
昭13　小切間(伊藤)美津子
昭13　片山(加藤)光子
昭13　八木(土井)幸子
昭14　長尾(水谷)貞子
昭15　田中家城ひで子
昭15　中野(荒木)美智子
昭15　松浦(武野)　茂
昭17　別所(松田)恒子
昭18　奥山（岡）美子
昭18　紀平(佐野)鈴子
昭19　吉田(小屋)洋子
昭20　蓮見(草深)方子
昭20④岡野(坂下)節子
昭20④杉山(多田)芳子
昭22　東猴(東猴)千恵子
昭23　小林(長谷川)幸子
昭23　宮際(中子)俊子
昭24　鏡（東畑）充子
昭24　加藤(大橋)節子
津高昭24　白井(村田)好子
昭24　今中　愛子
昭25　秋田　和彦
昭25　大田　経之進
昭25　来田(筒井)徳子
昭25　田中　秀和
昭25　田中　栄一
昭25　野田　殷生
昭25　久岡　隆治
昭25　太田　欣作
昭26　桑名　廉夫
昭26　小林　日出子
昭26　鈴木(武部)五六
昭26　矢原　貞一
昭26　真川(刀根)節子
昭26商勝田　光男
昭28　赤塚　健治郎
昭28　飯田(角田)滋子
昭28　岡田　榮之助
昭28　加藤　高宏
昭28　栢原(松岡)芳子
昭28　小林　拓
昭28　福島(澤野)弘子
昭28家伊藤　トヨ子
昭29　市川　隆朗
昭29　大倉　肇
昭29　加藤　洋治
昭29　北村　恒
昭29　小林(岡本)登志子
昭31　稲森　猛
昭31　川瀬　與彦
昭31　大藤(倉田)博文
昭31　山谷　登
昭33　坂本　国昭
昭33　佐野(古田)尚子
昭33　前葉(今村)和子
昭34　大石　雅巳
昭34　蔡（平蔡）寅基
昭36　上中(丸山)ふみよ
昭36　逆井　健夫
昭37　牛田　利治
昭40　中村　順昭
昭42　佐々木　真司
昭43　篠（伴）美千秋
昭44　井上　芳樹
昭44　海津　利勝
昭44　河瀬　光
昭46　森　敏之
昭50　山口　仁平
昭51　出口(波田)和一
昭52　亀井　久子
昭53　粉川(今井)純子
昭58　佐脇　章二
昭62　真弓　雄二郎

少し難しくもありましたが、大変興味深く先輩の偉大さに感銘を受けました。

その後総会、懇親会が行われ、津高クイズでは大いに盛り上がり、最後の校歌合唱では会場が一つになりました。これだけ多くの世代が集まり、交流できるというのは、伝統ある津高ならではだと痛感します。来年の再会を約して、本年度の総会はお開きとなりました。来年は、平成卒の若者！ぜひご参加を！　田中千裕（平成20年卒）

大阪同窓会

東日本大震災の本年、「絆を大切に」の気持ちを込めて、十一月六日天王寺都ホテルにおいて津高大阪同窓会が百四十名の出席のもと、盛大に開催されました。

来賓の皆様と奥田会長からの開催挨拶の後、40年卒の国文学者として著名な三浦佑之氏の「古事記にみる伊勢と出雲」と題した講演が行われ、アカデミックの中にもおもしろさを交えた話に出席者全員が興味深く聞き入りました。その後、戸澤大先輩の乾杯の発声を頂き、懇親会に入り、遠路ご出席頂いた恩師の杉浦先生・牛尾先生とともに、旧友との懐かしい再会と会話に花が咲きました。今年は初めて津高と津高大阪同窓会に関わるクイズゲームを実施しましたが、大好評で時間の経過を忘れました。

最後に現役大学生の紹介を行い、陳川・三重桜・津高の校歌を斉唱し「ふるさと」の大合唱で来年の再会を約束し、散会しました。

岡本幸二（昭和40年卒）

九州同窓会

平成二年に発足し、十八年間活動していただきました津高九州同窓会が解散されることとなりました。

九州全域と南は沖縄まで、会員は約百二十名。毎年初夏に総会を開き、九州同窓会報を発行されるなど、活発に活動していただきました。

非常に残念ではありますが、本年で解散することとなりました。これまでお世話いただきました幹事の皆様にお礼申し上げます。

尚、運営費の残高、五万五千円をご寄付いただきました。厚くお礼申し上げご報告いたします。　（事務局）

平成23年度同窓会を終えて

実行委員会副委員長　吉岡　正人（平成2年卒）

本年も八月六日に津都ホテルと津センターパレスにて「いってみよう きてみよう あのころに」をテーマに同窓会総会が開催されました。月日が流れるのは早いもので、私達平成二年卒が津高の学び舎を巣立って二十二年が経過しました。卒業式前日に体育館で同窓会への答辞を読み上げたことをつい昨日のように思っていましたが、自分も含め参加してくれた同級生の変貌した姿がそれを物語っていました。僕の個人的な意見で申し訳ありませんが、女性は綺麗になった人が多かった様に思われました。主幹事の昭和53年卒の方々のご尽力もあり大きな問題も無く総会・パーティー共に終了した事は副幹事学年としても大変嬉しく感じました。総会の全体の参加者数は七百六名。内、学年の参加者は八十名弱で、それぞれの持ち場でスタッフとして協力してくれました。総会・パーティー終了後に学年の二次会、三次会、四次会まで行いましたが、それぞれに再会を喜び話は尽きませんでした。今年は去年までの都ホテル会場の進行状況を映像でセンターパレス会場のスクリーンに映しての進行ではなく、それぞれの会場で同時進行ということもあり司会、開閉会宣言、会長、学校長の挨拶などもすべてが2回という試みでしたがいかがでしたでしょうか？平成卒の参加者が少ないという声が多く有ります。この会報や公式HPを見て、来年の総会・同窓会に一人でも多く参加していただけるようにして我が津高と津高同窓会を更に盛り上げていきましょう。最後に至らぬ点が多々ありました事をお詫びし、また同窓生の皆様による多大なご協力に感謝し総会終了の報告とします。

◆◆同窓会室が移動しました◆◆

四十六年間、お世話になりました同窓会室は、昨年七月十四日、本館から四号館に引越しました。永年、本館二階の中庭に面し、正面に経ヶ峰を眺めながらの業務でした。その部屋は、今は、進路指導の部屋となりました。

そこで、いつからあの部屋にと思い、ルーツを探ってみました。

「同窓会報の発行を祝して

学校長　市川一郎

校舎の竣工を記念して同窓会報が発刊されます。昭和三十五年八月に、陳川・三重桜・津高の三つの同窓会が一つに総合されてからの課題であったこの会報の発行と名簿の刊行が、母校の火災、―復興―募金が契機になって、生れ出ます。（中略）

学校も従来はともすれば同窓会に対して疎遠でありました。

これからは、新校舎内に資料室の名で同窓会関係の一室も作りました」と、昭和三十九年三月二十日発行の創刊号にありました。会報のルーツもわかりました。

新しい同窓会室は、二階に図書館、三階に書道室・音楽室・美術室などがあり、同じ一階には、家庭科室・和室などがあります。

スペースも広くなり、十五名程の会議が可能です。本館より少し遠くなりましたが、ぜひ、お立ち寄りください。

（事務局）

お知らせ

平成二十四年度　**同窓パーティー**

日　時　平成二十四年八月四日（土）
　　午後三時より

場　所　津都ホテル
　　津センターパレスホール五階

テーマ　「古き流れのここに合ひ
　　また新しき流れなす」

担当学年幹事　昭和54年卒（代表　小寺　徹也）
　　平成3年卒（代表　内山　隆司）

「母校の教壇ミニバージョン」を開催します

実行委員長　葉山　俊郎（昭和50年卒）

津高創立百三十周年、津高同窓会設立五十周年記念行事の一つであった「母校の教壇」が好評を博しましたので、本年度以降も続けることになりました。コンセプトは、社会での豊富な実体験を有する同窓生の方々より、その履歴を通じて体得してきた「よく生きる」ための知恵やヒントを、次代を担う現役生徒たちに向けて語り継いでいただく、というものです。現役生徒たちに、豊かな人生に向けた「指針」「希望」「元気」「気づき」を少しでも感じ取ってもらえればと思っています。

それは、現役生徒のみならず同窓生にも等しく興味深いものになると考えます。総じて、「津高人の元気」の一助、ひいては日本人の元気の一助、として参りたいと思っています。同窓生の方々も、是非ご参加ください。

日時　平成二十三年
　　十二月二十三日（金・祝日）
　　十時～十一時三十分
　　（質疑応答含む）

平成二十四年度同窓会

実行委員長　小寺　徹也（平成54年卒）

平成24年度同窓パーティーは、昭和54年卒と平成3年卒の学年が担当させていただきます。

今夏の同窓パーティーでは、二会場の運営を大変スムーズに進行され、幹事学年の皆様のご努力に敬服いたしました。

私たち幹事学年も、ご参加いただく陳川・三重桜・津高同窓生が「古き流れのここに合ひ　また新しき流れなす」ためのお手伝いができればと鋭意準備を進めてまいります。

来年度の同窓パーティーでも、会場別参加者に気を配り、お食事・アトラクションに配慮をいたします。

参加される皆様に、心地よい時間と空間を共有していただくことが幹事の務めと副幹事学年ともども努力をしてまいりますので、皆様のご出席を心よりお待ち申し上げます。

講師　大森　徳郎（おおもり　のりお）
　　（昭和35年卒、株式会社デンソー元副社長）

演題　「技術者冥利～自動車用電子制御システムの開発に携わって～」

会場　津高校　地学室（3号館4階）

※問合せ、申し込み　津高同窓会事務局へ、メール・FAX・はがきで、十二月十六日(金)までにお申し込みください。

文責　打田一馬（昭和59年卒・津高教諭）

（写真は昨年の母校の教壇より）

参加者募集

★第四回　学年対抗ゴルフ大会

学年対抗ゴルフ大会を開催します。ふるってご参加ください。

日　程　平成二十四年四月一日(日)

場　所　伊勢中川カントリークラブ
　　（津市一志町井生）

参加費　一二、五〇〇円
　　（プレー費・昼食・コース売店・パーティー代・会費含む）
　　キャディは別途　三、一五〇円

定員　百六十名（定員になり次第〆切）

※厳守　各学年三名以上十六名以内

※練習ラウンドの設定あり

※お問い合わせ・お申し込み先
　　津高同窓会事務局
　　TEL　059－229－7331

事務局だより

○会報四十九号を、二万五千五百部発行いたしました。

○住所異動の際は、卒年・名前・新住所をお書きの上、必ず事務局までお知らせください。
　葉書・FAX・メールで結構です。

○事務局開局日
　月・火・水・金曜日
　午前九時十五分～午後四時十五分
　お気軽にお立ち寄りください。

○会報は、ホームページにも掲載しています。今後、会報は、ホームページでご覧になっていただき送付不要にご協力いただける方はメールにてご連絡ください。

津高同窓会のホームページ
http://tsuko.jp/
メールアドレス
office@tsuko.jp
TEL・FAX 059-229-7331